
かぐや

橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かぐや

【Zコード】

N3874S

【作者名】

橙

【あらすじ】

文緒の仕える屋敷には、一人の姫君がいる。
「雲居の方」と呼ばれる、天女のように美しい姫が。

「竹取物語」からの創作。

—(前書き)

「竹取物語」からの創作小説です。
原典がお好きで、そうした創作に抵抗を覚える方は、ご注意ください。

阿部の大臣がお帰りになる。

ちょうど東門近くを警備していた文緒には、何人かが簾子を渡つていいく密やかだが慌ただしい足音が聞こえた。

直垂に丈夫な手甲と脛巾はざまきをつけ、腰には借り受けた刀を差し、格好は武者然として屋敷を背に立つていたが、つい気をひかれて文緒は耳をそばだてた。

大臣の一行はいつも東の棟で用を済ませたら、ぐるりと母屋を回つて庭などを愛で、ゆうゆうと西の正門から帰つていく。来る時は驚くほど素早いのに、帰りは未練たらしく亀のようにのろのろとして、なかなか帰ろうとしないのだと評判だった。西門の車宿には既に、豪奢に飾り立てた車がとめてあるだろう。文緒は見たことがなかつたが、屋敷を車にしたかのような大きさと、簾に金糸を施したというそのきらびやかさについて話は聞いていた。

篝火の薪木がはせて、足元を照らす火影が揺れた。文緒は何気なく空を見上げた。今夜は雲もなく、星が明るく美しい。阿部の大臣が来た時と、瞬く星の位置はさほど変わつていなかつた。

文緒のすぐ隣にいた侍が、「なあ」と小さく声をかけてきた。

「今日は特に短いな。一刻ももたなかつたんじやないか」

まさに同じことを考えていた文緒は、ちらりと隣に目を向けた。

顎鬚をはやした侍が、にやにやと愉快そうに笑つている。

確か、男鹿という侍だ。文緒は少しの間考え、そう思い出した。雑舎で共に寝起きする仲間である。かといって、別段親しくもない。話をしたことがないので、どういう人物なのかも知らなかつた。だ

が男鹿は、妙に馴れ馴れしい調子で言葉を続けた。

「阿部殿もおかしいそうに。きっとまた、体よくあしらわれたんだろ？」

なあ、と同意を求めるが、文緒は頷かなかつた。阿部の大臣を「かわいそうに」とは思わなかつたからだ。だが男鹿は構わず、一人で喋り続けた。

「さすが『雲居の方』様だよ。本当に、誰が姫様の御名を得る」とがでできるのやら？」

「雲居の方」とは、この家のたつた一人の姫君　竹姫のことだ。天女のように美しく、芳しい姫。主夫婦が掌中の珠のようにいつくしみ、取るに足らぬ者では垣間見ることさえかなわない。その意から、いつしか「雲居の方」という一つ名がついた。

だがこの二つ名には、ひそかな揶揄も込められている。それは、竹姫が数多寄せられる求婚を断り続けていたことからきていた。

地上の男には興味のない、天の上とく氣位の高い姫。「雲居の方」とは、そのような意味もあつた。

一方では感嘆と称賛を、もう一方では嫉妬と怨嗟を込めて囁かる名である。男鹿のにやにやと下卑た笑いからは、後者のあてこすりが透けて見えた。

「とんでもない姫君だよなあ、まつたく」

男鹿は肩を組むような気安さで、文緒に顔を近づけた。

「馬鹿馬鹿しい条件をふつかけては、やんごとない方々からの求婚さえ断つているといつじやないか。お前も、聞いたことがあるだろ

？」「う

息のかかりそうなほど寄せられた髭面から、文緒は顔をそむけた。共感を求められても、頷く気など毛頭ない。話す気はないと態度で

示したつもりだったが、男鹿は気を悪くする様子もなく続けた。

「花の命が短いとも知らず、持て驅されて、団に乗つておるのだろうよ。さしたる血筋でもない、鄙の姫が 」

「黙れ」

ついに堪えきれず、文緒は遮った。

「主家の姫様に向かつて、そのような口を聞くなど。無礼だぞ」
だが男鹿は唇を歪め、肩をすくめただけだった。文緒の言い分を、
建前だけのものと取つたようだった。

「主家など」

男鹿は鼻で笑つてみせた。

「どうせ、我らは一時の雇われ者だろう。美しさを鼻にかけた女と、
そのおかげで成り上がつただけの家を、どう敬えと?」

この家の警護をする侍たちは、つい先頃雇い入れられたばかりだ
った。まばゆいばかりという竹姫の美しさの噂が世に広まるにつれ、
夜な夜な屋敷に忍び込もうとする輩が後を絶たなくなつた。それを
憂えた主人が、屋敷の警備にと侍を集めただの。

男鹿も、その時に集められた侍の一人なのだろう。まだこの家に
対して忠義に篤いとは言えず、むしろ気に食わないとさえ思つてい
るようだつた。男鹿はふと眉をひそめた。

「そういえば、警護の全てが雇われ者ではないのだったか。なるほ
ど、下人あがりの侍とは、お前のことか」

しげしげと見られ、文緒は黙つてついと目をそらした。だがそれ
が答えになつたようで、男鹿は納得したとばかりにははあ、と声を
上げた。

「名は確か、文鷹とか申したな。なるほどなるほど、確かに変わり
者だ」

変わり者と言われて、文緒の眉間の皺がぐつと深くなつた。
いい加減、この男の馴れ馴れしさに我慢がならなくなってきた。
苛立ちをにじませて、文緒は聞いた。

「……何がだ」

男鹿は顎を撫で、にやりと口の端を釣り上げた。
「だつてお前、この家の主に疎まれてゐるそつじやないか」

「

文緒は虚をつかれ、言葉につまつた。男鹿は眉を上げ、值踏みするように文緒の全身をじろじろと眺め回した。

「下人あがりの賤しさを疎まれてゐるのか？まあ確かに、貧しさのにじみ出でているような顔立ちだが……」

「貧しい顔立ちはお互い様だ」

文緒は冷たく言つて、無駄話を切り上げようと男鹿から数歩離れた。怪しげな者がいないかどうか、辺りを見回す。その背中に、男鹿の軽い声が投げられた。

「それだから変わり者だと言つんだよ。たかが下人のくせに、主に『嫌われている』。お前一体、主殿に何をしたんだ？」

文緒は答えなかつた。大仰な男鹿のため息が聞こえたが、それも無視した。そもそも警護中に無駄口など叩いていては、家人にどうされてしまう。阿部の大臣が帰つても、夜が明けるまでは、文緒たち侍の仕事は終わらない。

主に疎まれてゐるそつじやないか。

何氣ない男鹿の言葉で、この屋敷に来てもう十年近くになるのだと、ふいに思い出した。

涼やかな風が、どこからか淡い萩の花の香りを運んできた。柄にもない、郷愁のような切なさがこみ上げそうになり、文緒は差し慣れぬ刀の柄を、ぐつと握り締めた。

夜半、警護を一時交代し、男鹿と文緒は雑舎に戻った。

侍らが入る雑舎は屋敷の北東にある、まだ真新しい小屋だ。ここに十人ほどの侍が詰め、寝起きしている。中に入ると、小さな燭台で灯りがとられ、すでに何人かの侍がくつろいでいた。

戸口のすぐ脇に棚が置かれ、その上の大好きな土器には、厨から運ばれた強飯の握り飯がいくつか用意されている。同じく短い休憩に入った侍らが、板張りの間に座り、黙々とそれを食べていた。

握り飯を手にとって、文緒は座る場所を探してぐるりと周りを見回した。そして、僅かに目を瞠つた。

「土間を上がつてすぐのところに、珍しい人物がいたからだ。

「これは、佐貫殿」

文緒より先にその人物に気づいた男鹿は、さつと礼をして、不真面目な顔を器用に隠した。文緒も遅れて頭を下げる。

大層不機嫌な顔をした家人の佐貫が、苛立たしげに足を踏み変えながら立っていた。

誰の目にも、家人の虫の居所が悪いことは明らかだつた。おかげで握り飯を頬張る侍たちは皆神妙な顔をしていて、明るく「冗談を言う者などいなかつた。

「この侍たちは、一息入れる時には下世話な噂話などをして笑い合つのが常だ。文緒は別段それを聞きたいとは思わないが、この舍がしいんと重く静まり返つてているのは、何か居心地悪く感じられた。

文緒はそつと背をかがめて移動し、目立たない土間に面した部屋の隅に座つた。目をつけられ、難癖をつけられてはたまらない。下

人の頃からずつと、この家人が苦手だった。

だが男鹿はへらへらと笑い、あの独特の気安さで佐貫に声をかけた。

「佐貫殿、このよつなむさ苦しい所まで足をお運び頂いて、かたじけのうござります」

ペコりとこだわりなく頭を下げるから、男鹿は窺つように首を傾けた。

「ですが……何ぞ、ございましたか？」

なぜこの家人が、侍の雑舎にいるのか？この場の誰もが疑問に思つていて聞けなかつたことを、男鹿はいとも容易く、さらりと尋ねた。なるほどあの馴れ馴れしさは、人の懷に飛び込む時には大した武器になるのだと、文緒は感心する思いだつた。自分には逆立ちしても真似できないことだ。

「ふん、用などないわ。……手がすいたのでな、お前たちの監督もわしの仕事だ」

佐貫は憎々しげに吐き捨てた。男鹿が気の抜けたよつな声で返す。「はあ、お手がすいて……」

男鹿はとぼけたが、「手がすいた」とはつまり、客人 阿部の大臣があまりに早く帰つたせいで、文緒でさえも予想がついた。佐貫は親指の爪でも噛みそつた勢いで、苛々と言つた。

「まったく、このじろの竹姫様のなさりようは、常軌を逸している。阿部様に向かつてあのよつな態度をおとりになるとは、ひどいお叱りを受けてもおかしくないぞ」

誰かに向かつて言つたのではない、独り言めいた愚痴だったので、侍たちは誰もそれに応えなかつた。よほど腹にすえかね、不満だつたのだろう、佐貫はぶつぶつと小言を続けた。

「今度は『火鼠の皮衣』だ。わしは見たことも聞いたこともないぞ、

そんなもの。どこにあるとも知れぬ『火鼠の皮衣』を持って来いとは、縁談をお受けする気がないと言つてゐるようなものだ……」
聞くともなく佐貫の独り言を聞いていた文緒は、思わず口元を緩ませた。

ひどく、懐かしいものを聞いたからだ。「火鼠の皮衣」とは、もう何年ぶりに聞いただらうか。思いがけず旧友に会つた思いで、文緒の胸の奥がふと温かくなつた。

「何を笑つてゐる?」

険呑な声が飛んできて、文緒ははつとして顔を上げた。離れた所からどうぞとく見つけたのだろうか、佐貫が腕を組み、じろりと厳しい目つきで文緒を睨んでいた。

文緒はすぐに顔を伏せ、他意のないことを示した。だが、佐貫は床板を踏みならして文緒の目の前に来るや、もう一度問うた。

「何を笑つておるのかと、聞いたのだ。え?」

「……え、笑つたわけではありません」

平伏し、文緒は小さく答えた。それは本心からであつた。

佐貫を笑つたわけではない。ただ懐かしく思つただけだ。だが佐貫は唐突に、文緒の肩を蹴り上げた。

「賤しい下郎が、馬鹿にしあつて!」

蹴り飛ばされた勢いで、文緒は背中から床にビリビリと転がつた。叩きつけられるようにひどく背と肩を打つたが、とつと手をついて、土間に転げ落ちるのを避ける。

だが手の中の握り飯は投げ出され、『うるうと土間を転がつた。

文緒は思わずあ、と小さく声を上げて、土まみれになつて転がる握り飯を田で追つた。

「ここに『置いてもらつて』いる『恩を忘れてはいやしないだらうな』お前など、いつ放り出してやつてもよいものを！」

佐貫はもう一度おまけとばかりに、文緒の肩を蹴飛ばした。痛みで少し息がつまつたが、文緒はすぐに姿勢を立て直して、平伏した。目を閉じて、佐貫の怒りが解けるのを待つ。嵐をやり過ぐすには、黙つてじつとしているのが一番良いのだと、文緒は知つていた。

佐貫は面白くなさそうに、ふんと鼻を鳴らした。

「姫様の話を笑つた罪は重いぞ。覚えておれ」

唾を吐きかけるようにそう言い、佐貫は乱暴な足取りで舍を出て行つた。

佐貫の足音が去り、文緒はゆっくりと顔を上げた。周りの侍が、はつとしたように素早く顔をそむける。家人の怒りにふれた文緒に声をかける者も、助け起こそうとする者もいなかつた。

じんと痛む肩のあたりを押さえながら、文緒は土間に降りた。握り飯は土にまみれ、台無しになつていて。だが、大事な夜食である。今でさえ空腹なのに、これを失えば明日の朝には目を回すはめになつてしまつだらう。文緒はそつと、崩れた強飯を拾い集め始めた。ふと顔を上げた時、にやにやと笑う男鹿と目が合つた。

疎まれている。この家に。

ほうら見る、と言われたような気がして、文緒は目をそらした。

疎まれ、嫌われていると、誰より文緒自身がよく知つている。だがそれを、他人に面白がられたくはなかつた。

土間に跪いたまま、文緒は飯の塊を大きく頬張つた。じやりじやりと、砂を噛む感触を、無理やり飲み下す。食べなければならぬ。食べなければ、勤めを果たすことができない。勤めを果たさなければ、この家にいられない。

文緒は、放り出されるわけにはいかないのだ。

文緒は十にも届かない幼い頃、山に捨てられた。

暮らしが立ち行かなくなつて、口減らしのためだつた。前年からの日照りがたり、その年は田畑が何一つ実りをつけなかつた。おまけに流行り病で文緒の父と兄弟がばたばたと死に、家には働き手がいなかつた。

だから、仕方のないことだつた。それに珍しいことではなかつた。

文緒の父は国府に勤める小役人だつたが、暮らしは他の百姓と同様、貧しかつた。父は体が弱く度々臥せつていたので、文緒には構つてもらつた思い出がない。

父が死んで、母は少しだけ暮らし向きが良い男のところへ、後妻として嫁ぐことになつた。

けれどその家も子沢山で、もう子どもはいらなかつた。母の嫁ぐための条件は、ただ一人残つた文緒を「始末」して、身一つで来ることだつた。

周りは食つに困つてゐる家ばかりで、養子に出す先もなかつた。文緒は父に似て体が弱く、よく熱を出しては寝込んでいたので、欲しいという者もいなかつた。追い詰められた母親は、河原に暮らしていた男に一握りの米の入つた袋を渡し、文緒を託した。

母の代わりに、文緒は見知らぬその男に手を引かれ、山に捨てられたのだ。

最後に見た母親の姿は、こちらに背を向け、頃垂れているものだつた。男が何を言つても、決して振り返ることはなかつた。ほつれ髪のかかる痩せた首筋に、文緒は何か言つことも、手を伸ばすこともできなかつた。ただ黙つて、男に手を引かれるまま、家を出た。

荷物のよう[で]ことも知らない山の中に運ばれ、ひとり残されて、文緒はしばらく動けなかつた。

黄昏の山道は薄暗く、静かだった。鳥の声も、風が木々の葉を鳴らす音も、谷へと吸い込まれて文緒を置き去りにした。家に帰りたい、母の所へ戻りたいとは思つたが、自分が「捨てられた」ことは理解していたので、呆けたようにその場に座りこむことしかできなかつた。

このまま食えて、骨になつてしまつだらうか。それとも熊や狼の餌になるのだらうか。じわじわ染みこむ恐怖にも、心が麻痺したようになつていた。文緒は煙のように頼りない自分の命の行方を、ただ果然と見つめていた。

涙も出なかつた。

しばらくそうしていた時、文緒は小さな声を聞いた。

一 父さん、母さん

かすれた細い泣き声だった。文繕ははりと顔を上げた。

文織が男に連れられて来た道を、回りくどい子とおぼつかない足取りで歩いて来た。その子は泣きじゃくっていた。涙を拭う腕はやせ細つていて、足は黒く汚れていた。

自分と同じだと、文緒はすぐにわかつた。この子も、捨てられたのだ。 口減らしで捨てられるのは、珍しいことではない。こんなにも、ありふれていることなのだ。

文緒は立ち上がり、その子に近寄った。顔を真っ赤にして泣いて、二子が、まかんと顔を上げた。

近づいてみるとその子は文緒よりいくらか小さな子で、文緒は流れていた子は、ぽかんと顔を上げた。

行り病で死んでしまつたすぐ下の弟を思い出した。

弟も泣き虫だったので、文緒はよく頭を撫でてやつていたのだ。

一度面影を重ねてしまつと、もう放つておく」とはできなかつた。

「……おいで」

そうして文緒はその子の手を引いて、誰もいない山道を歩きだした。

月明かりだけを頼りに、二人は山道を歩いていた。

底の知れないほど深い山の暗闇は恐ろしかつたが、文緒はそれに蓋をして見ぬふりをしていた。文緒が怯えれば、やつと泣きやんだその子もまた動けなくなつてしまつ。震える足を叱咤して動かし、恐ろしさから氣をそらすために文緒は喋り続けた。

かたく繋いだ手だけが温かかつた。

「『火鼠の皮衣』は、遠い天竺の国にあつて、火にくべても燃えないんだ」

喋るのは、毎夜母から聞いていたお伽噺だった。

文緒は寝床で母のお伽噺を聞くのが大好きだつた。兄弟は皆、話の途中で寝てしまつことが多かつたが、文緒だけは夢中になつて聞き、いくつも母にせがんだものだつた。

母は早く寝なさいと、困つたようにため息をついていたが、それでも文緒が満足するまで不思議な世界の話を続けてくれた。飽きもせず、何度も同じ話をせがんだこともあつた。

だから文緒は、どのお伽噺もそらで話すことができた。

「ひねずみつて何？」

「炎をまとつて走る鼠のことだよ。真つ赤な体をした、野火をもたらす獣」

お伽噺を語ることは、母親の温もりを思い出すことだつたけれど、

文緒はその悲しみを押し殺した。今はもういらない兄弟と、競つて母の腕にすがつて話をせがんだ。夜は母のお伽噺を聞きながら、皆で体をぴたりと寄せ合つて、隙間風をやり過ぐして眠るのだ。

ついついこの間まであった日常だとここのに、その想い出はもはや、お伽噺の天竺の国よりも遠かつた。

「……どこに行くの？お家はこいつちなの？」

その子が不安げに周りを見回した。

その問いに、文緒は答えられなかつた。

家には帰れない。自分たちは捨てられたのだから。迷いなく手を引いて導いているようでいて、文緒にはここがどこなのかもわからず、向かう先もなかつた。今歩いている道がどこかの里へ続いているのか、それとも奥山へ迷い込んでしまう道なのかもわからない。けれど歩くことをやめてしまつたら、もうそこで死んでしまう気がした。何かに追われているような気分で、文緒はあてもなくただ歩いていた。

風か獣か、近くの茂みががさりと音を立てて揺れた。一人はびくりと身を竦ませて、ついに足をとめた。

恐怖を抑え込んでいた脆い蓋が外れて、文緒の背中にじりりと冷たい汗が流れた。

月の光は木々の梢に遮られて、すがるにはあまりにか細い。眼前にぽかりと口を開けて待ち構えている深い闇に、ここは人のいて良い場所ではないのだと、文緒はまざまざと悟った。

繋いだ手からかたかたと震えが伝わって、文緒ははっとして隣に立つ子どもを見た。

暗闇に魅入られたように目を見開いて、その子は歯の根も合わぬほど震えていた。これほど恐怖に追い詰められた人を、文緒は見たことがなかった。

「お母さん！」

その子は小さく、悲鳴のよろよろとした。

文緒は打たれたように、立ちすくんだ。それは、文緒自身の叫びでもあった。

お母さん。

本当はそう言つて、大声で泣きたかった。どうして捨てるんだと母をなじつて、いい子でいるからと謝つて、家に帰りたかった。

捨てられたことを受け止められず、心が麻痺してぼんやりしてしまっていたけれど、そうすればよかつたのだ。仕方がないなどと思わずには、泣きわめいて、母と一緒にいたいと言えばよかつた。

けれど、もう遅い。ソリで泣いても、怒っても、絶対に母には聞かない。

文緒は震える子どもらを抱き寄せた。

なぐさめも、安心させられる言葉も言えない文緒の、それが精一杯だった。

この子がかわいそうだ。そしてこの子どもらは、自分自身だった。

文緒はかばつとうその子を抱きしめて、ゆっくりとその場に座り込んだ。

文緒とその子のどちらが震えているのか、もうわからなかつた。心の臓が早鐘を打つ。文緒は固く目をつむつた。目を閉じた暗さの方が、まだ恐ろじへない気がした。

怖い。怖い。

「……皮衣があつたら、あつたかいだろうなあ」

震えた声は、恐怖を誤魔化し切れてはいなかつた。きっと鼓動の音も、その子に伝わつてしまつてしているだらう。だが文緒は無理にでも明るい声を出そうとした。

「こんな山でも、きっと寒くない。それに珍しい宝物だから、皆が欲しがつて……きっと、腹いっぱいになるくらいの食べ物と換えられる。そうしたら……」

そうしたら、家に帰れる。

そう続けることはできなかつたが、文緒は腕の中で震えるこの子が、少しでも楽しいことを考えればいいと思った。闇にのまれる恐怖ではなく、楽しいお伽噺の中にいたかった。

文緒もこつして、温かい母の腕の中でお伽噺を聞いていた。母の

語るようにはいかなかつたが、文緒はそれを思い出しながら、語り続けた。

「珍しい宝物は、他にもたくさんある。しうがねこがね、紅さん」。どんなんのかよく知らないけど、すこしきれいなんだつて。海の中の竜宮や、偉い仙人さまのお屋敷を飾つているんだ」

一度も見たことはないけれど、文緒はまぶたの裏に、きらきらした宝物を思い浮かべた。思い描くことは簡単だ。方法は、お伽噺の夜に、母から教わった。

「しうがねは晴れた朝の雪みたいで、こがねは輝く満月みたいなんだつて」

暗い山の中に、母はいない。火鼠の皮衣も、珍しい宝物もない。ここにこむのは、自分と、小さなこの子だけだった。

月明かりさえ、頼りにならない。暗闇の恐怖を紛らわしてくれるものは、物語しかなかつた。

「仙人さまのいる蓬萊には玉の枝があつて、それは根がしうがね、茎はこがねでできるんだ。白玉の実がなつていて、とてもきれいで……」

「……白玉つて、食べられる？」

腕の中の子は、おずおずと文緒を見上げて、小さな声で聞いた。いつしか、震えはおさまっていた。一人ともまだ鼓動は早く、体は緊張で強張つていたが、文緒は少し笑つた。上手くお伽噺に誘い込むことができたようだ。

「知らない。でも木の実なら、食べられるんじゃない？」

文緒が答えると、その子は少しだけ肩の力を緩めた。

暗いのでよくわからないが、どうやら笑つたようだつた。

「……おいしいのかな。甘いといいな」

ぐう、とどちらかの腹が鳴つた。文緒はこいつそりと睡を飲み込んだ。

食べ物を思わせる話は、やめた方がいいかもしない。ひもじさには慣れてはいたが、空腹を思い出すと、どうしても気が沈んでしまう。

他の話にしよう。不思議な物語は、たくさんあるのだ。

「あのね、昔、泉で水浴びをしていた天女さまがいてね……」

月が傾き、その子が疲れて眠りに落ちるまで、文緒は語り続けた。身を寄せ合つて、少しでも寒くないよう、おそろしい夜を過げした。

そして、この子と最期まで歩き続けようと決めた。

足が動くかぎり歩いつづけ。いつか疲れ果てて倒れるまで、一人でいよ。

自分もこの子も、泣かないよう。さみしくないよう。恐怖と悲しみに押しつぶされないよう。

II (下) (後書き)

白玉は真珠の1つです。食べられないですね…

文緒は庭先に跪いていた。神妙に顔を伏せてはいたが、内心ではなぜ自分はここにいるのかと、大いに混乱していた。じつと地面の白砂を見つめながら、文緒は耳だけすまし、自分のおかれた状況を把握しようとした。

簾子の上には平伏する文緒を見下ろして、佐貫がにやにやと笑つて座つてゐるのだろう。高圧的に呼び掛ける声には、この状況を楽しむような喜色があつた。顔は見えずとも、文緒の狼狽は伝わつているようだつた。

「早く答えぬか。もつたいなくも中納言様が直々に、お前に聞いているのだぞ」

文緒は一層頭を低くし、額を地面に擦りつけた。困惑して、唇をかむ。

答える、と命令されても、それは許されないことだとわかつてゐる。身分が違うのだ。うつかり文緒が口を聞こつものなら、弁えようと打擲されてしまうだろう。

頭上、佐貫より遠くから、高くくぐもつた声が聞こえた。

「構わぬから、申せ。『燕の子安貞』とは一体何なのだ？」

これが中納言の声なのだろうか、それともつき従つてゐる隨人のものなのか、文緒にはわからなかつた。ただ男にしては甲高く細い声だと思つただけだ。

まだ日は中天を越したばかりと高く、文緒が警護の任につくような時間ではない。だが昼間から、この屋敷には石上中納言が訪ねていた。

阿部大臣と同じく、石上中納言もまた竹姫に求婚している一人だつた。中納言殿について、文緒が知つてゐるのはそれだけだ。だがどういゝわけか、文緒はその中納言から呼びつけられ、こうして尋問を受けてゐる。文緒はこの展開にまったくついていなかつた。

そもそも、「佐貫殿がお呼びだ」と言われてここに来たのだ。何か雑事でも言いつけられるのだろうと思つてはいたが、まさか貴人の前に引き出されるとは思つていなかつた。

何か高貴な方の目に留まるほどの粗相をしてしまつただろうか。文緒は近頃の自分の行いを急いで思い返したが、見当もつかなかつた。

佐貫はもつたいたいぶつて言つた。

「こちらにいらっしゃる石上中納言様は、竹姫様との婚儀を上げられる予定の御方だ」

「

文緒の息が止まりかけた。思わず、ぴくりと肩が跳ねる。

「だがその証しに、竹姫様は『燕の子安息』を『所望なのだ。お前、その宝について知つていることを申せ』

つまりは、中納言もまた他の婿候補者と同じように、難題をぶつけられたのだ。文緒はゆっくり息を吐き出して、肩の力を抜いた。佐貫の言い様ではまるで、婿殿は中納言に決まつたかのようだ。だが、中納言殿の手前そう言つただけで、実際のところは違うのだう。

「燕の子安息」とは、今回もまた大層な難題だ。そしてやはり、懐かしい。ほつとしたせいか気が緩んで、文緒は口の端だけで苦笑した。顔を伏せてゐるので、前のように見咎められることはない。

そのことが有り難かつた。

「許すと言つてゐるのが聞こえぬか。顔を上げよ。疾く申せ」

先程の甲高い声が、苛立つたように急かした。文緒は迷つた末に、ゆっくりと顔を上げ、簣子の上を仰ぎ見た。

勾欄の向こうから、佐貫が冷ややかにこちらを見下ろしている。その他は誰の姿も見えなかつた。件の中納言は、奥の底にでもいるのだろう。ここから姿が見えるのは佐貫だけだというのに、何人が自分に注目しているような、肌に突き刺さるほどの気配を文緒は感じた。

「……」

けれど依然、どう答えてよいものかわからず、文緒は黙つたままでいた。

なぜ中納言が、自分に「燕の子安貞」のことを尋ねるのか。それがわからなかつた。

文緒は宝など一つも見たことはないし、燕や貞についても詳しくなどない。中納言ほどの身分であれば、もつと見識の広い人物をいくらでも知つているだろう。それなのに、なぜ文緒などに訊くのか。その意図がわからなかつた。

「燕の子安貞」という言葉自体は、知つてゐるものだつたが、それを素直に語つていいとも思えなかつた。

「佐貫よ。そやつは本当に知つておるのか？」

沈黙し続ける文緒に苛立つたのか、高い声が不審げに問う。佐貫は奥に向かつて、深々と頭を下げた。

「はい。その文鷹と申す者は、先日竹姫様が阿部大臣様にござ所望になつた『火鼠の皮衣』のことを、存じておつたのです」

文緒はぎょっとして、思わずまじまじと佐貫を見つめた。

体、何のことを言つてゐるのだろう?

佐貫はこちらを一瞥もせず、奥の中納言へ淡々と続けた。

「『火鼠の皮衣』を知るなら、どうして『燕の子安貝』を知らないことがありましょ。大臣様にはその秘密を耳打ちしたというのに、どうして中納言様には申し上げられないことがありますか」「空言だといふこともあるではないか」

「さて」

佐貫はそこでちらりと文緒を見下ろした。目を細め、文緒だけにわかるように笑う。

嘲りの笑みだった。

「その時は、この賤しい者を相応しく裁かねばなりますまい。ですがよもや、知らぬということはないでしょ。皮衣を知らぬと言つた私を、これは笑つたのですから」

覚えておれ。

憎々しげに佐貫が吐き捨てた言葉を、文緒はやつと思い出した。むき出しになつた悪意に、ぞつと血が引くような思いがした。

「火鼠の皮衣」に思わず笑つてしまい、それを佐貫に見られて憎まれたのは、ほんの三日ほど前のことだ。佐貫はそのことを、思つた以上に深く根に持つていたらしかつた。

これは、報復なのだ。文緒ははつきりとそう悟つた。

いつの間にか、文緒は阿部大臣には協力したことになつてゐる。黙つてゐることも、何か言い逃れすることもできない状況が、佐貫によつてつくられていた。

文緒が「燕の子安貝」を知つてゐると答えようが、知らないと答

えよつが、空言であると咎めるつもりなのだろう。文緒よりも佐貫の言葉が重んじられるのは明らかだ。そして中納言まで巻き込んだ以上、罰は重くなる。

佐貫は「燕の子安里」などありはしないとわかつていて、この状況をつづったのだ。文緒を罵にかけるために。

「では答えよ。『燕の子安里』とは、どこにあるのだ？」

甲高い声が、高圧的に降ってきた。袋小路に追い詰められたような思いで、文緒の背を冷たい汗が伝った。

四(下)

「燕の子安貝」などあるいはしない。だがその言葉を、文緒は知っていた。正確には、その謎かけを知っていた。

「『燕の子安貝』は、どこにあるか？」

捨てられ、山の中を放浪していったいつかの夜に、文緒はその話をしたことがあった。

「……子安貝って何？」

共にすゞしていいた子どもは、匂をきゅっと寄せて首を傾げた。

海を知らぬ文緒は、本物の子安貝を見たことなどない。この子も同じなのだろう。文緒もどんな物なのか上手く思い描けず、母からの受け売りを、見てきたように語ることしかできなかつた。

「卵みたいな丸い貝で、珍しい宝物の一つだよ。あと、子宝のお守りなんだって」

「『燕の』ってことは、燕の巣にあるんじゃないの？卵みたいな、燕が産むんでしょ？」

ぐるりと田を回して、その子は不思議そうに言つた。考え込むその仕草は、やはり幼い弟にそつくりだ。文緒は懐かしくて口元を緩めた。そうして微笑もうとすると、一人で話す時以外あまり動かさない類の肉が、引き攣れてぴきりと痛んだ。

夜にお伽噺をすることは、文緒とその子の決まりごとなつていた。

田のある明るいつやは、ほとんど黙りこくつて山道を歩く。ひもじさは草の茎を噛んで誤魔化し、喉の渴きは岩窪にたまつた雨水をすすつてしのいだ。ふらつく足で少しずつ進み、夜は疲れ果てて、

木のつるや瓶かげにうずくまつて眠つた。その眠りに落ちる僅かな間で、身を寄せ合つてお伽噺を語るのだ。

文緒は首を振つて、その子が出した答えを否定した。

「悪し。燕は子安貝なんか産まないよ」

「わかつてゐよ。でも、『燕の子安貝』って言つから」

その子は不満そうに唇を尖らせた。

そう、文緒の言つことは矛盾してゐる。だがそこが、謎かけなのだ。

「答えはなあに？早く教えてよ、お兄ちゃん」

文緒の汚れた衣の端を引っ張つて、子どもはせがんだ。

数日一緒に過げして、この子がはきはきした子なのだとこいつを、文緒は知つた。

素直で率直な子だ。特別わがままでも堪え性がないわけでもないが、この子は自分が何をしたいかちゃんとわかつていて、それをつけり文緒に伝える。自分の望みに疎くて、口の重い文緒にとつては、とてもうらやましい性質だった。

疲れたら休みたいと言い、眠たくなればお伽噺の途中でもすこんと寝てしまつ。自分にはないその素直さに文緒は戸惑つたが、同時に小気味良くもあつた。

だがこの子は、「家に帰りたい、お母さん会いたい」とは、もう一度と言わなかつた。

「燕の巣を探しても、子安貝はない。つまり、無駄つてことだ」

答えを話しながら、文緒は密かに久しぶりの優越感を味わつた。

謎かけの答えを知る者だけが味わえる、たさやかな優越感だ。

「『燕の子安貝』なんてない。探しても無駄だ。つまり『かひなし』。わかる？」

子どもはきよとんとしたが、ややあつて答えを理解したのか、「

なあんだ」と眉を緩ませた。

「『燕の子安貞』なんて、ないんだ。つまんない」
ふてくされたように言つたので、文緒は少し慌てた。この謎かけは
おもしろくなかったらどうか。

「まあでも、誰も探したことはないから。本当にないがどうかはわ
からないよ」

「じゃあもしかしたら、『かひあり』かも？」

その子がおもしろげに微笑んだので、文緒もほつとした。
「うん。そうだったらおもしろいね」

「『燕の子安貞』は、あつません」
長く迷つた末に、文緒はそう言つた。
「……私は、そうとしか存じ上げません」
文緒は深々と平伏した。目を閉じて、沙汰を待つ。文緒が言える
のはこれだけだった。

案の定、頭上からは怒りに裏返つた声が飛んできた。

「佐貫！ やはりこやつは宝のことなど、知らぬのではないか！」

「この者に縄をかけよ。虚言じよみて中納言様を惑わせた罰じや」

佐貫は手を打ち、大声で命じた。

すぐさま脇から侍らが駆け寄ってきて、文緒を地面に引き倒し、
頭を押さえつける。あまりにも素早く、文緒が何かをする隙もなか
つた。

やはりこれは最初から、準備されていたことなのだ。

固い地面に強く押しつけられ、身動きはおろか息さえできなか
つた。文緒は苦しげに呻きながら、からうじて顔を動かし、息を吸お

うとした。

視線を僅かに上げれば、佐貫の姿が見える。簾子に立ち、文緒を見下りしている。

嘘ではない、と言つこともできた。これは謎かけのだから、「燕の子安貞」はない、「かひなし」で正解なのだ。

だが、どうしてもそこまで教える気にはならなかつた。自分を見下ろし、笑う佐貫に、答えを教えてやるのは嫌だつた。

淡い優越感などありはしない。それはただの、文緒の意地だつた。「柱に括りつけ、竹の鞭で打て。その後のことは、追つて沙汰しよ

う

」そう命じてから、佐貫は階をゆっくり下りて、地べたに倒れ伏す文緒の前に立つた。

屈みこみ、文緒の髪をむんずとつかむ。無理やり頭を持ち上げられる痛みで、文緒はまた呻いた。

「今度こそこの屋敷から追い出してやる。汚らわしい下郎め」低い、文緒だけに聞こえるような、押し殺された声だつた。

「お前は疫病神だ。いるだけでお館様のお心を惱ませ、煩わせる」ひとりと、視線が合わさる。佐貫の眼差しはじつとりと暗かつた。「大方、お館様を騙してこの屋敷に入つたのだろう、疎まれるわが身を省みて、疾く去るがいい」

佐貫は文緒の頭を地に叩きつけるように手をはなした。頭を打つた衝撃で目に火花が散る。だが文緒は瞬いてそれを払うと、佐貫を睨みつけた。

腹の底に火がついたかのような怒りが、かつとこみ上げた。

「……違う

くいしばった歯の隙間から、文緒はそう言った。

主人を騙してこの屋敷にいるのではない。文緒がここにいるのはそんな理由ではない。

どれだけ疎まれ、憎まれたとしても、文緒はここから絶対に去らない。

佐貫の憎しみのこもった目つきに、文緒も同じだけ怒りをこめて睨み返した。

何も知らないくせに、吐き捨ててやりたかった。だがそれは、許されないことだ。

先に視線を別の方へ向けたのは佐貫だつた。立ち上がり、何事もなかつたように「連れて行け」と命じる。腕を後ろへねじり上げられ、引きずられるように文緒は運ばれた。

厨の脇へ引っ張り込まれて見えなくなるまで、文緒はずつと佐貫を睨み続けた。

四(下)(後書き)

【蛇足】「かひなし」の掛詞…「具なし」と「甲斐なし」(無駄だ・
取るに足らぬ)」

雨垂れが軒を打つ微かな音が聞こえる。文緒は目を閉じて、高い熱に夢と現の境をふらふらと彷徨いながら、それに耳を傾けていた。

厨に近い、薪と藁が山と積んである小屋に、文緒は寝かされた。

藁に埋もれるようにしてうつ伏せ、破れた薄い小袖を衾がわりに被っていた。地から這い上る肌寒さは身に堪えたが、それでも雨を防ぐ屋根と、冷氣の広がらない小屋の狭さがありがたかった。

鞭打たれた背はまだ熱を持ち、それは体全体に飛び火して文緒の意識を混濁させていた。手当ては滲んだ血を拭つた程度で十分ではなく、どうにか自力で巻いた布も、億劫で取り換えていない。背が燃えるように痛いので仰向けになることができず、身動きすることすら辛かつた。

覚めているのか眠つているのか、もはや自分でもわからなかつた。厨番だろうか、この小屋にも誰かが出入りしていくつだつたが、記憶は曖昧でふつぶつと途切れていった。

高い熱で朦朧とする感覚は、文緒にとつてひどく懐かしいものだつた。体が重く、思い通りにならない無力感は、幼い頃によく味わつていたものだ。

母のひんやりした手が額を撫でた気がした。かと思えばその感触はすぐに遠くなり、暗闇に消える。弟が心配して文緒の顔を覗きこんでいる。それはすぐに、共に山道を彷徨つたあの子の顔になり、最後には怒りに歪んだ佐貫の顔になつた。

「ここから出て行け、疫病神め」佐貫が文緒をずるずる引っ張り、

屋敷から追い出されたとする。文緒はその手を振り払おうとしたが、できなかつた。手を引く男は、母に頼まれて、文緒を山に捨てに行くのだ。仕方ないことだ。珍しいことでもなかつた。もう一方の手には、僅かな米の入つた袋。「怨むなよ」と言つた彼も、飢えていた。

暗い山道は恐ろしかつた。ただ、あの子の手の温かだけが救いだつた。怖いことのないよう、一人でお伽噺の中で遊ぶのだ。あの子が目を輝かせてくれるのが嬉しい。「でも、もういいの。何もいらないよ」どうして泣くのかわからない。月には、何の悲しみもないはずなのに。

「　おい、生きているか

いくつかの断片的な夢を見ていた文緒は、その声と共に振り起された。

ぼんやりと目を開けると、こちらを覗きこんでいる黒い影が目に入つた。視界は薄暗い。目が霞んでいるのか夕刻だからなのか分からず、文緒は数度瞬きをした。

傍らにいる人物の顔は見えない。だが、その声には覚えがあつた。

「男鹿……？」

「お、生きておるようだな」

男鹿は笑つたようだつた。文緒は痛む背を庇いながら、どうにか身を起こした。

いくらか気分がましになつてゐることに気づいて、額を押さえて息をはく。汗で着物がはりつき、それが不快だつた。

「寝ておつても良いぞ。様子見ついでに飯を持って来てやつただけだ」

男鹿は無造作に、文緒の横に胡坐をかけて座つた。ほれ、と竹の皮にくるまれた握り飯を差し出す。文緒は礼を言つて受け取つたが、

まだ食べる気にはならず、そのまま膝の上に置いた。

「中納言殿に無礼をはたらいた罰としては、まあ、それで済んでよかつたな」

軽く言われて、文緒はちらりと男鹿に目をやつた。

夕闇の薄暗さにも大分目が慣れてきた。少し目をいらせば、近くにいる男鹿の表情も見える。男鹿はにやにやと笑い、問いつみつて首を傾げた。

「百叩きの上、放り出されるのかと思ったが。不思議だなあ」

「……」

文緒は黙つたままでいた。正直なところ、追に出されなかつたのは文緒にとつても意外なことだった。

中納言を騙した罰として、文緒は鞭で血が滲むほど背を打ちつけられた。おかげで背の皮は裂け、腫れ上がっている。だが、それだけだつた。

罰としてはひどく中途半端で、軽いといつてよかつた。佐貫はあれほど追い出すと息巻いていたのだが、どういうわけかそうはならなかつた。騙りの汚名はそのままで、傷の手当をされたわけでもない。それなのに、積極的に叩き出されはしなかつた。後はどこへなりとも行けというようになり、ここに放置されている。佐貫の情けであるはずがない。では、何故なのか。文緒にとつても、それが不思議だつた。

「寝込んでおつても、誰の見舞いもないとはな。氣の毒なことだ」

薪小屋をぐるりと見回して、男鹿はふんと鼻で笑つた。

「お前、それほど嫌われてゐるのに、ここから出て行かんのは何故だ?」

顎の鬚を撫でながら、男鹿が訊く。単純に、面白がつているような聲音だった。

「叩き出されなかつたのも不思議だが、お前が逃げ出さないのも同じく不思議だ。……わしならこんな目にあえれば、この屋敷などすぐに出で行くが。他に雇い入れてくれる屋敷など、いくらでもあります」

やはり変わり者だと言われていたので、文緒はふいと顔をそむけた。

追い出されるのは、文緒にとつて僥倖だった。だがそれと、文緒が出て行かない理由は別だ。

文緒が自分からここを出て行くことはあり得ない。何をしても、岩にかじりついてでもこの屋敷から離れない。文緒はそう決めている。

そしてその理由を、男鹿に語りつとは思わない。

「……外では何か、変わりはないか」

答えるかわりに、文緒はぽつりとそう問い合わせ返した。男鹿は虚をつかれたように、きょとんとして数度瞬いた。

「……あ、ああ、そうだな。お前が騙ぐらかしたとかいう中納言殿だが、高い所から落ちて大怪我をしたらしいぞ。何でも、燕の巣にある子安貝を探していたとか」

馬鹿馬鹿しい、と男鹿は鼻を鳴らした。

文緒や男鹿でさえも、「燕の子安貝」などありはしないとわかるのだ。それなのに、教養ある貴人がわからないとは、何ともおかしな話だった。だがその高雅な目を曇らせ、露の幻を追わせるのが、「雲居の方」の美しさなのかも知れなかつた。一旦見てしまえば、世の男は正氣ではないのだろう。

あるいはそれが、「恋」なのかもしれない。

「中納言殿は寝ついてしまい、竹姫様との縁談も流れてしまつたそ
うだ。……まあ、こんな難題をふっかけられる時点で、望みのない
縁談だつたのだろうが」

「ほんやりとい考へこんでいた文緒は、その言葉で引き戻された。
「……そうか」

文緒は膝の握り飯に皿を落とした。喜ぶな、と自分に言い聞かせ

たが、胸にほつと安堵が広がるのを止めようがなかつた。

「そんな目にあつたといつのに、忠義者だな。屋敷のことが気にな
るのか」

やれやれ、と男鹿は呆れたよつに肩をすくめた。

本当に忠義だらうか、と文緒は思つ。

たつた今、姫様の縁談が流れたことを聞いて、安堵したのではないか。主の不幸を喜んだのではないか。それを果たして、忠義と呼べるのだらうか。

本当の忠義者というのは、もしかしたら、文緒より佐貫のことな
のかもしない。ふとそう思つた。佐貫が文緒を追い出そうとする
のは、個人的な好惡もあるだらうが、第一は主人のためだ。主人が
文緒を忌み嫌うのに、倣つているのだ。

そんな思いに捕らわれながら、文緒はほんやりと答えた。

「……屋敷を警護し、姫様を守るのが私の役目だ。御身に変わりが
ないか、不埒者が近づきなどしてないか、気にかけて当たり前だろ
う」

そう言つて、文緒は握り飯を一口頬張つた。熱のせいで味などせ
ず、噛むのにやたら力が必要だつたが、体を戻すためには食べなけ
ればならない。文緒は一口、三口と続けて齧りついた。

「……なるほど」

膝に頬杖をついた男鹿が、妙にしみじみと言つた。

「少し、合点がいった気がするぞ。お前の忠義は、この屋敷に向かっているのではない。『雲居の方』様に向かつているのだな」

ぐつと、飯が喉に詰まりかけた。文緒は咳きこみながら、顔を上げた。

「それで、ここから離れられないのか

「……」

口を押さえて、文緒は咳で答えを誤魔化した。男鹿がまた、傍らからひょいと竹筒を差し出す。有り難く受け取つて、喉に冷たい水を流し込んだ。

「……見たことがあるのか、『雲居の方』を」

男鹿が静かに問いかける。文緒はすぐに「いや」と首を振つた。

「まさか。姫様は、住む世界が違う」

天女のよう美しい姫。遙か遠い「雲居の方」だ。文緒の手が届くはずもないし、垣間見られるわけもない。

まさに月のようだと、文緒は思つた。美しさも、その遠さも。

男鹿は意外そうに、「へえ?」と眉を上げた。

「てっきり、何かの弾みに姫様を見たのかと思つた。それで姫の美しさに取り憑かれて、忠誠を捧げているのだと」

「違う」

文緒はまた首を振つた。だが男鹿は納得いかなさそうに、ふむと顎を撫でた。

「それ以外、理由が思いつかんのだが。お前が、『雲居の方』に恋しているのだという以外に、理由があるのか?」

「……恋では、ないだろ?」

文緒は目を伏せた。

「恋」とはおそれなく、阿部大臣や石上中納言のよつなことをいうのだ。美しい天上の月を追い求め、供物を捧げ、手を伸ばす。だとすれば、文緒の中にあるのは恋ではなかつた。

文緒は美しい「雲居の方」を見たことはない。捧げられる供物もない。かの人を、追い求めようなどとは思わない。

ただ、なるべく近くがいいと思つて、せめて守る役目でありたいと思つて、ここにいるだけだ。

きっと、ただ独りよがりなだけだらう。

「わからん。恋ではないなら、忠義を捧げて何になる?」

その問いに、文緒は答えようと唇を動かし、そのまま言葉を失つた。

答えなかつたのではない、答えられなかつたのだ。胸の内に、答えはなかつた。そこはぼっかりと空白だつた。

文緒がここにいるのは、約束だからだ。それは揺らがない。

けれどそれは一体、何のために、誰のためになつているのだらう。文緒は自問し、瞳を揺らがせた。何のためになるのかなど、考えたこともなかつた。

ここに居続けることの意味を、考えなくなつてどれくらこ経つのだらう。

「……まあ、お前の勝手だらうが

男鹿はそう言つと、膝を払つて立ちあがつた。伸びをするよつこ軽く腕を伸ばし、何気ない口調で言つ。

「恋ならば、やめておけと言つただらう。お前が言つた通り、住む世界が違つのだ」「

声は軽いのに、その言葉は何故かひどく真剣に響いた。不思議に思つて、文緒は顔を上げた。

暗がりに沈んで、男鹿の顔は窺い知れない。だが少なくとも、笑つてはいないと思った。

「 身分違いの恋など、田も当てられない」

男鹿が去つて、文緒はただ一人暗い小屋に残された。

体はだるく休息を求めていたが、文緒はしばらく身を起こしたままでいた。じつと身じろぎもせず、男鹿の残した問いを考えていた。

六(上)

文緒の熱は翌日には大方引き、その次の日には、痛みをおして警備に立つことができた。

もとの雑舎に戻つて来た文緒を、他の侍らは何事もなかつたかのように迎え入れた。正確には、文緒をまるでいなかのようには扱つた。

傷は大丈夫かと声をかける者も、事情を聞こうとする者もいない。文緒が近づけば、皆気まずそうに目をそらした。逃げるよう距離を取る者もいた。もともと親しい仲間などいなかつたが、あまりに露骨な態度に戸惑つてしまふほどだつた。

男鹿もあれ以来、声をかけてくることはない。見舞いに来たことなどなかつたように知らぬ顔をして、皆と同様に文緒を遠巻きにしている。もしかしたら侍たちは、佐貫から何か言い含められているのかもしれなかつた。

そんな状況を、文緒はただ淡々と受け止めた。

下人時代から、一人で過ごすことには慣れている。屋敷の主から疎まれている文緒に、近づく者はいなかつたからだ。

文緒を気にかければ、巻き添えをくらつて主の勘気に触れてしまふかもしれない。そんな警戒心が皆に働き、いつも文緒をぼつんと孤立させた。親切に声をかけてくれる者も、文緒の疎まれようを知り、やがては離れていった。

心を許し、語りあうことなどなかつた。言葉を交わすとすれば、温度のない仕事の言づてや用事ばかりだつた。

文緒の淡々と静かな、相手と距離を取る物言いや態度は、いつも日々の中から学んだものだ。

だが、改めて遠巻きにされることは、思つた以上に文緒の胸にこたえた。

一人は平氣だ。平氣だが、どうしてもむなしかつた。

この屋敷に来て、もう十年にもなる。

十年ここに生きてなお、自分を繋ぐ絆を作れなかつたのだと思うと、ずつしりと重い徒労感が襲つた。今までも、これからも、自分は一人なのだろう。自分という存在が、風に舞う根なし草のように、軽いものに感じられた。

文緒はここにいるが、ここは文緒の居場所ではないのだ。その空虚さが、胸の内を淋しく冷やした。

文緒をここに繋ぎとめるものは、絆や縁ではなく、古い約束と小さな意地だつた。他には、何もなかつた。

文緒はこの屋敷に来て、仕事を得、日々の糧を得た。飢えることがなくなつて、丈夫な体を得た。

それなのに未だ、先の見えない暗い山道を歩んでいる気にはるのは何故だろう。今の方が孤独だと、感じるのは何故だろう。

そんな思いは、背中の痛みと共に、文緒の気を滅入らせた。

その夜は月が出ていた。僅かに丸みを欠いた、いよいよ満ちるのを待つ、十三夜だ。

文緒はその月を、東の棟近くで見ていた。

月は冴え冴えと明るく、屋敷の庭を白く照らしている。篝火を焚かずとも良いほどだつた。

前栽の葉一枚一枚が妙にくつきりと見え、小さな池は磨かれた鏡のように静かに、天上の月を映している。風も凪いで、ただ鈴を振

るような虫の音だけが響いていた。雲の上のよつと、どこか現とは思えない光景だった。

いけないと思いつつも、文緒はぼんやりとそれを眺めていた。体調は大分いいものの、未だ本調子とまではいかない。物思いもあって、いつになく警護に身が入っていなかつた。

本当なら文緒と共にこの場所を受け持つ侍がいるはずだったが、周りには誰もいない。徹底して避けられているのだと思つたが、今はどうでもよく、むしろ有り難いとさえ感じた。美しいこの光景を、誰にも邪魔されずに一人で眺めていたかつた。

文緒は月明かり誘われるよう、南側へ歩き出た。館に邪魔されないところで、もつとよく庭を眺めよつと思つたのだ。

微かな音がしたのはその時だつた。

背後でかたりと音がして、文緒ははつと足を止めた。慌てて振り返る。ふらふらと歩いて、警護を怠つてゐるところを見咎められたら、今度こそ追い出されてしまつかもしれない。あの日文緒を見下ろした佐貫の顔が、さつと頭をよぎつた。

振り返つた先、屋敷の東に面した半蔀が一つ、何故か上げられていた。蔀戸は、朝には日の光を取り入れるために上げるものであるが、いつもなら夜は風を入れないよう、上下ぴたりと閉じられてゐるはずだった。不審に思つて、文緒はそちらに一步近寄つた。

半蔀の奥に垂らされている御簾が、かさりと揺れる。誰かが、その向ひにいるのだ。文緒は眉をひそめ、どうすべきか逡巡した。

怪しい者が忍び込んだのなら、大声で呼ばわつて、すぐに取り押さえねばなるまい。だが、東の棟は屋敷の最奥だ。ここに出入りするのは、この屋敷でも主の近くに侍るような身分の、限られた者たちしかいない。そのような人を不審者扱いしては、今度こそ文緒の

首が飛ぶだろ？

文緒は怪しげな半蔀の方へ慎重に近寄つて、御簾の向こうの人影の様子を、息をひそめて見守つた。

簾子の陰に身を隠そうかとも思つたが、あえて姿を見せるように立つた。文緒からは御簾の中の人物は見えないが、中からは文緒が見えるだろう。不審者ならば慌てて逃げようとするはずだし、屋敷の誰かなら文緒のことなど問題にしないはずだ。

その反応を見極めようと、文緒は目を凝らした。

だが、御簾の向こうの人物は、そのどちらの行動も取らなかつた。御簾が一度、大きく揺れた。次の瞬間、その隙間からすつと、白い指先が伸びた。

「文緒！」

驚きに満ちた、だが抑えられた声と共に白い顔が覗いて、文緒は動けなくなつた。

六(下)

その人がもどかしげに御簾を押しのけ、はめ込まれた下の半襟を掴んで身を乗り出そうとするのを、文緒は呆然と見ていた。思いつめた苦しげな表情で、こちらに手を伸ばす。月に照らされるその人の顔は、とても美しかった。

紅葉色の衣は、月明かりの下ではどこか褪せて見えた。小袖の上にその单衣をはおつただけのその姿は、頼りなげでやけに小さい。だがその人はなお、内側から輝くようだつた。

小ぶりの瓜実顔はみどりなす黒髪に縁取られ、頬と唇はみずみずしくふわりと紅い。顔立ちにはまだやさしい少女の風情を残しながらも、既に洗練された、匂い立つような色香があつた。伸ばされた指先は小さく細工物のようで、触れていいものとは思われなかつた。これほど美しい人を、文緒は見たことがなかつた。

だが確かに、幼い日の面影はあつた。

月の下で笑う遠い日の幼子が、今まさに十年の時を超えて、姫君に重なつた。そのことに文緒は息をのんだ。堰き止められていた年月がどつと押し寄せ、足元が揺らぐようだつた。

「雲居の方」様だ。誰に聞かずとも、文緒は雷に打たれたよううにそつと知つた。

それは瞬きの間であつたが、永遠のようにも思われた。長い一瞬が過ぎ去つた後、文緒ははつと我に返り、すぐにその場に膝をついた。

姫ならば、顔を見て良い相手ではない。文緒は低く頭を垂れた。

文緒

雲居の方の、押し殺した囁き声がした。

「そこのことは、文緒ね？お願い、もしそうなら、何か言って…

■ ■ ■

懇願するような声に、文緒は唇を噛んだ。

文緒が顔を見て良い相手ではない。話しかけて良い相手ではない。自分にそう言い聞かせ、ぐつと押さえつけていなければ、すぐにでも立ち上がつてしまいそうだった。真っすぐに顔を見て、確かに自分だと、呼び声に答えたかった。

呼び声に答えて、そうして自分も、名前を呼び返したかつた。

湧き上かる望みは息がつまるほど激しく、文緒自身が驚くほどだつた。すべてを水泡に帰してもいいから、今ここでかの人にこたえたいと、胸の中で暴れるものがいる。

だあつたことに文緒は驚いた。
淡々と期待を殺し、心を無にして過ぐす日々の中では、それは失わ

「……………」

雲居の方はぽつりと、言葉を落とした。その声は布越しのように、ぽつりとぐぐもつて震えている。泣いているのかと、文緒の胸はまたざわついた。

「部を開けて、一人にしてと言つて……。お母様は、いい顔をしなかつたけれど、」
でも、と姫は続けた。

「あなたに会えるなんて。……」なんことが、あるのね

本当に、と文緒は心の中で頷いた。

会うことはないと思っていた人だ。望みなど持ちようもなく、遙か天上の月のように、住む世界が違うのだと思っていた。

これほど近くにいるということさえ、忘れていた。

「どれほど会いたいと思っていたか……。お願い文緒、声を聞かせて」

重ねて願う声に、文緒の心は揺れた。

こたえてしまおうか、と迷う自分がいる。

「雲居の方」と口を聞けば、ここにはいられない。それはずっと昔にした契約だった。

けれども、この屋敷に居続けることに何の意味があるのだろう。疎まれ憎まれ、空虚さに心を侵され、何が得られるのだろう。

約束を果たすことができなくなるけれど、この夜に、この方に会うことができるだけで、もう十分だという気がした。今までの日々の中で、文緒はこの方に何もして差し上げられなかつた。そばにいたいとこの屋敷に執着したのは、ただの独りよがりだ。

そんなことを続けるより、今ここで、彼女にこたえることの方が、ずっと大切ではないのか。

けれど文緒は、顔を上げることができなかつた。

ぐつと、砂を掴む。迷う心とは裏腹に、何か大きなものに頭を押さえつけられているかのようだつた。

彼女は「雲居の方」様だ。踏み越えることのできない隔てが、文緒と彼女にはあつた。

手を繋ぎ、隣で歩いた幼い日は幻のように遠い。今や一人の道は大きく分かれ、まさしく天と地ほどに隔たつた。

雲居の方はその美しさが天下に鳴り響き、やんごとない方々からの愛を乞つ文が、曰く」と降るように舞い込んでいるという。方や文緒は、吹けば飛ぶような身の上だ。比べようもない、厳然たる差が、二人の間には横たわっていた。

文緒が不用意に近づくことで、彼女の何かが傷つき、損なわれでもしたら。そんな恐れが浮かんで、言葉を返すことができなかつた。矛盾する心に引き裂かれてしまいそうだつた。

呼び返す彼女の名は、もう喉元までこみ上げてきているというのに。

「……私が誰か、わからない？ 文緒、あなたは」

姫はそこで、息をのむように言葉を切つた。そして、一層鋭く声をひそめる。

「誰か来るわ。……もう、行かなくては」

文緒は弾かれたように顔を上げた。

この思いがけない邂逅は、あつけなく終わろうとしていた。葛藤は煙のように消え去り、苦い後悔がどつと襲つた。

またとない機会を、文緒は失うのだ。何もできず、ただ迷つただけで。彼女の姿を、もう一度と見られないかもしないのに。

誰かが来てしまうなら、もう文緒が口を開くこともできない。この場を見咎められでは、文緒だけではなく彼女にも害が及んでしまうだろう。　主家の姫と下人など、知りあうはずのない二人なのだ。

「文緒、もし、私の名を覚えているのなら」

「雲居の方は声をぐもらせ、早口で言つた。

「満月の夜に、『私の生まれた場所』に来て。……待つてあるから

祈るような響きを落とし、姫は御簾の向こうへと姿を消した。微かな衣擦れの音がして、気配が去った。

文緒はしばらく跪いたまま息をひそめ、じっとその場に留まった。人の近づく気配がしないかと探つたが、声も足音も聞こえなかつた。十分に時間がたつてから、文緒は立ち上がつた。

開かれた半蔀に、かの人はいない。文緒は力なく顔を伏せた。

誰もいないこの屋敷の片隅に、ただ立ちつくす。つい今しがたの出来事なのに、もはや夢か幻かと疑つてしまふほどだつた。懐かしさも慕わしさも、燃えるように抱いた望みも、姫君が去つた今は、泡のように消えていた。けぶるような尾花の穂を揺らす風が、胸の熱を冷ましていった。

田を開じて、瞼に残つた姫の面影を追う。息をのむほど美しくなつっていたのに、変わつていないので思つた。芳しい香りも滑らかな絹の衣も、幼い頃にはなかつたけれど、それらは付属品にすぎなかつた。彼女の美しさは、そんなものではない。文緒はそれを知つていた。

満月の夜に、「私の生まれた場所」に。
文緒は田を開き、僅かに欠けた十三夜を仰いだ。

その場所の心当たりは、一つしかなかつた。

ナ (上) (前書き)

この話には、一部「野ざらしの死体」に関する描写があります。
該当箇所は、に挿まれた部分です。

ご不快に思われる方は、大変申し訳ありませんが、該当箇所を読み飛ばす等のご対策をお願いいたします。

この件に関しては、4月14日の活動報告に記してあります。

幼い文緒とその子がついに力尽きて動けなくなつたのは、どこかの竹林の中だつた。

足は文字通り棒きれのようになり、もう歩く氣力も失せていた。体は疲れ果て、力が入らない。空腹で頭がぼんやりと霞み、全てを億劫に感じた。

二人は肩をくつつけて寄り添い、青々と伸びる竹にもたれていた。遙かな空には満月が雲間からのつそりと顔を出し、竹の葉をかきわけて白い光が降り注ぐ。文緒とその子は言葉もなく、それを仰ぎ見ていた。

夜の闇と月明かりは、文緒たちの黒く汚れた手足を上手く隠し、洗い流したように白く見せていた。だがやせ細つた腕が本当に骨のよう見えて、文緒はぼんやりと、同じだと思つた。

住んでいた家の近くの河原にも、たくさんの骨が転がつていた。今の自分は、の人たちと変わらないのだと思つた。彼らも長い間雨風にさらされて、白い骨になつたのだ。それは文緒のよく知る光景だつた。

昔、まだ兄弟が生きていた頃には、その光景はとても恐ろしかつた。白い骨と、まだ骨になつていらない人々が転がる河原を見て、文緒は恐ろしくて飛ぶように家に逃げ帰つたのだ。そして母の袖にすがりついて、震えていた。母に背を撫でてもらつて、怖いことは何もないのだと思えるまで。

けれど今は全て遠く、現実感がなかつた。今や自分も、彼らと同じようになるのだと、淡々と思うだけだつた。もはや逃げ帰る家も、すがる袖もないのだ。

肩にかかる子どもの重みは、羽のように軽いものだつた。その子は文緒の肩に額を預け、目を閉じていた。

眠つているのかもしれない。いや、もしかして。文緒はそつと、その子のこけた頬にへばりついた髪をかき上げてやつた。そして、青白く見える顔をじつと注視した。

口元が動いて、薄い胸が僅かに上下する。まだ、生きている。文緒はほつと息をはいた。傍らの温かさにほほ、まだ、命があるのだ。

けれど、この夜は明けないだろう。

文緒はうつすらと、それを予感した。自分もこの子も、朝日を見ることはない。じきに、小さなともし火は吹き消えるだろう。力の入らない体が、そう告げていた。

けれど、文緒には不思議だつた。

暗闇も死も恐ろしいはずだ。それなのに、恐怖はなかつた。恐ろしさは、肩に寄りかかる温かさが吸い取つているかのようだつた。寂しさも悲しみもなかつた。

すごい、と文緒は思つた。この子が怖い思いをしないように、文緒はお伽噺を語つていたけれど、いつの間にか慰められているのは文緒の方だつたのだ。恐怖も寂しさもないのは、この子のおかげだ

つた。

黄泉路へと旅立とうとするこの時、一人ではないことが、ただ嬉しくほっと安心することだった。文緒はぐたりと垂らされたその手を取り、感謝をこめてそつと握った。

子じもは瞼を震わせ、ゆっくりと田を開けた。

起こしてしまったかと、文緒は少し申し訳なく思った。その子はぽんやりと文緒の顔を見て、それから空を仰いだ。竹の葉の間からこぼれる月明かりが頬にさし、その子は眩しそうに田を細めた。

「……お月さま、まあるいね」

ぽつりともれた言葉に誘われるよつて、文緒も天を見上げた。

「……本當だ」

遙か遠くにかかる月なのに、やけに大きく見えた。うさぎの影の模様も、くっきりと見える。……あれをうさぎなのだと教えてくれたのも、母だった。

「ねえ、お月さまのお話、もう一回して」

天を仰ぐ子は、文緒の手を小さな力で握り返してねだった。

月の話、と文緒は頭の中を探つた。そういうえば前に一つ、話したことがあった。

「黄金の月の富の話？」

「うん」

その子はこくつと頷いた。本當は、話すことも億劫だつたけれど、文緒は乾いた唇を舐めて話し始めた。

お伽噺もきっと、これが最後なんだろう。やつ思えば、惜しむことはなかつた。

「……月には、まばゆく輝く大きな富があつて、満月の田には、そこで宴が開かれる。きれいな天女さまがひらひら舞つて、笛と太鼓

が賑やかに鳴るんだ。甘い果物と、お酒と、「じゅそつがたくさん並んで……」

今、あそこでその宴が開かれているのだろうかと、文緒は黄金の月をじっと見つめた。

「そうして宴も終わる頃、月に住む仙人さまと天女さまは光の雲に乗つて、下界に下りてくる」

その光の雲からは、艶やかな楽の音が鳴り響き、芳しい香りがするのだという。宴に飽いた月の人々は、下界を眺め遊ぶのだ。天人にとっては輝かない黒い土も、黄金でできていない木々も、珍しくおもしろいのだろうか。

そして月の住人は、下界で見つけた佳人を、宴に招待する。

「よほど素晴らしい人でなきや、宴には招かれないと……詩歌や管弦の才ある人とか、姿の美しい人とか。だから招かれるのは、すごく名誉なことだ」

けれど月は、地上とは違う。

「気をつけなければいけないのは、一度月に行つてしまえば、なかなか帰つてこれないこと。時の流れも違うから、注意しなくちゃいけない。地上に戻つて来たときに、知り合いが誰もいないことになるから」

静かに文緒の話を聞いていた子どもは、少し首を傾げた。

「……お兄ちゃん、月に行きたいと思う?」

急に問われて、文緒は言葉に詰まつた。

そんなこと、考えたこともなかつた。

「わからない」

文緒は素直に答えた。そして逆に、問い合わせた。

「……月に、行きたいの?」

「うん」

その子はすぐに頷いた。迷いのない、真っすぐな答えだった。
「そんなにいいところなら、行つてみたい。……簡単に戻つて来れ
なくとも、いいから」

遠くへ思いを馳せるような口調だつた。この子にも戻ることので
きる場所はないのだと、文緒は思い知らされた。

進む先も戻る場所もない、一人が在ることを許されるのは、今こ
の竹林だけだつた。

輝く月の宮の下、そこに行くことを夢見て、二人は淡く微笑み合
つた。その子は無邪気に言つ。

「一緒に行こうね」

「……うん」

文緒は小さく頷いた。

この子のようにひたむきに、月へ行きたいと思つてゐるわけでは
なかつた。でも、ついて来てほしいと言つのなら、共に行こう。
文緒を少しでも必要してくれるのはきっと、この世でこの子だ
けなのだ。

その子は安心したようだし、田を閉じた。うつむく青白い顔には、疲れが色濃く影を落としている。終わりの時は近いのだと、文緒は思った。

すぐ近くの地面の溝みに、小さな水たまりができる。暗がりに沈んでいて見えにくかったが、水面がちらりと光の粒を映したので、それに気づくことができた。文緒は軋む体を起こし、その水たまりに近づいた。

これが、文緒がこの子にしてやれる、最後のことになるだらう。

文緒は黒く沈む水を、両の掌でそっとすくった。

水たまりは小さく、文緒の手では多くをすくい上げることまできなかつた。じぼさないよう注意を払いながら、ゆっくり、膝を摺るようにして子どもの傍へと戻る。

月の光が真つすぐ降りそそぐべとに、手を差し伸べた。

「ほら、見て」

囁くと、その子は目を開け、ほんやりと不思議そつな顔をした。
「なあに?」

文緒はその子に捧げるようだし、手を持ち上げた。

文緒の掌の中の水に、粒のような月が映つていて。揺らめきながらも、確かに丸い形が見て取れた。それを覗きこんで、子どもは驚いたように息をのんだ。

「わあ」

手の中に小さな瓶を閉じ込めたかのようだつた。遙かな月の宮が

今、文緒の手の中に浮かんでいた。

文緒は笑つて、手をその子の口元に近づけた。

「月をあげる。 黄金の富へ、迷う」となく行けますよ」と

言葉には、心からの祈りを込めた。そつと手を傾けて、月を浮かべた水をその子の口に注ぐ。

黄金の富は碎けて光の雫となり、子どもの中へと落ちていった。

唇を湿らす程度しかない水を、じっと味わうよつて子どもは目を閉じ、天を仰いだ。

月明かりを浴びて、小さな顔と細い首筋が、白く輝いていた。水がその喉を下り、体を廻つて隅々まで行き渡るのが、文緒には目に見えるかのようだつた。深く息をする「と、と、と、」その子の何かが急速に変わつていくのを感じた。

睫毛が震えて、子どもの目がそつと開く。黒く丸い瞳が、うつとりと細められた。 今度は文緒が、息をのむ番だつた。

「ありがとう」

月を手に入れた子どもは、ふらつきながらも立ち上がつた。

そんな力が、どこに残つていたのだろう。呆然と見上げる文緒に向かつて、その子は大輪の花のように笑いかけた。

「月は甘いのね。今まで飲んだどんな水より、おいしかった」

たつた一口の水で、子どもの顔を暗く覆つていた死氣が吹き飛んだかのようだつた。瘦せこけたはずの頬はみずみずしく輝き、泥に汚れた髪は今や、黒く濡れたようなつやをもつていた。月の光が見せる錯覚なのだろうか、文緒は目を疑い、まじまじと見つめた。

白い光を領巾のひわように身にまとい、その子は堂々と立つていた。まるで今、月から降り立つた天女のようだ。月の光を從えて、輝く

よしに美しい。

天女。そう、女の子だ。文緒は衝撃を受けて目を瞠った。

驚くほどかわいらしい女の子だと、初めて気がついた。まだ幼い童女だが、磨けばいすれ玉のごとく光る美しい乙女となるだろう。そう思わせる萌芽があった。

今まで共に過ごしていたのに、どうして気づかずにいられたのだろう。信じられない思いだった。

子どもの顔には確かに、貧しさで染み付いた翳りがあった。それは、文緒には馴染みの翳りだった。自分も兄弟も、飢えた人々の誰もがもっていた翳りだ。日の下ではそれは誤魔化しようもなく顕わで、だから文緒は、弟のようだと思ったのだった。

けれど夜の闇が翳りを溶かし、月の光が泥の汚れを濯いだ今、この子の美しさを隠そうとするものはなかつた。萎れた花が水を得てふつくらと花弁を開く、それよりも速く劇的な変化を、文緒は目の当たりにしたのだ。

今までに語つたどのお伽噺よりも、驚くべき夢のよつた出来事だった。

「今なら、月の宮へも行けそうな気がする。不思議だね、なぜだかそれくらい、元気が出てきたの」

その子ははにかむように笑つた。

きつと錯覚だ。まもなく力尽きる体が、儂い幻を見せているのだ。けれど、彼女に満ちる生氣は嘘ではなかつた。弱り衰えた少女は死に、そしてまた生まれ直したかのごとく、別人のような輝きを手に入れていた。

「ねえ、お兄ちゃん。名前を教えて」

「こり笑い、その子は文緒に手を差し伸べた。光の下のその手を、文緒は呆然と見つめた。

名前。そうだ、文緒との子はこれまで、互いの名も知らず歩んできた。文緒は初めて、そのことに気づいた。

これほど近くにいて、弟のように思っていたのに、名すら呼んだことがなかつたのだ。今まで、そのことに何の疑問も抱かなかつた。互いしかいない、ひたすら暗い山道を行く日々の中では、名前など必要なかつた。文緒は尋ねようとも思わなかつた。

空つばをのみ、文緒は答えた。

「……文緒」

緊張で声はかすれた。恐る恐る伸ばした手を、その子はすくい上げるよに取つた。

「お兄ちゃん、文緒っていうんだね」

嬉しそうに声を弾ませ、少女はぎゅっと文緒の手を握つた。

「ありがとう文緒。お話をしてくれたことも、月を溶かした水をくれたことも。今まで文緒と一緒にたから、怖くなかったよ」

文緒はぽかんとしたまま、彼女を仰ぎ見た。

「わたしの名前は

文緒は彼女の名を知つた。その後長く胸中で呼び続けることになる、その名を。

そして、月からの使者が来た。

屋敷はならかな山を背に建つてゐる。屋敷の者がただ北の山と呼ぶだけの、名もない丘陵だ。その一角は竹林となつていて、屋敷の主人の所有する土地であつた。

竹林は自然に繁つてゐるものではなく、きちんと管理されていた。太く良い竹だけを残して間引きをするので、竹林の中はよく日が差し込み、風がすすしく吹き通る。青々と高く伸びた竹はよくしなり、また色つやも良く、細工物に大変すぐれていた。

主人自慢の竹林だ。「竹姫」の名前も、ここからきていた。

もともと主人は、竹細工を売つて身を立てた人だつた。

今でこそ蔵が建つほどの財があり、屋敷は貴人のそれと肩を並べるほど広い敷地をもつてゐる。だがそれは、ここ十数年ほどの短い間に主が勝ち取つたものだつた。それまでには、長く苦労の時代があつたといふ。

若い頃の主は市に出向いて、地べたに敷いた筵に、自らつくつた籠やびくを並べていた。声を張り上げ、道行く人々にそれらを売るのだ。その時代を知る者は、今では主自身と、長年連れ添つた妻の二人しかいない。

そのせいか、主の竹に対する思い入れは並々ならぬものがあつた。だからこの広い屋敷を造る時にも、よい竹のとれる竹林に近い、ここを選んだのだった。

文緒はその竹林に一人、立つてゐた。

警護の任の最中、こつそりと持ち場を離れて屋敷を抜け出したのだ。抜け出すのは、拍子抜けするほど簡単だつた。

相変わらず、文緒の周りには誰もいなかつた。おまけに雇われ侍たちがまだ知らないような小さな潜門を、文緒はよく知つてゐる。誰にも見咎められることはなかつた。

身の回りのものは、昨夜のうちに整理をつけてあつた。ずつしりと肩に乗つていた重石がとれたような、どこかおぼつかない身軽さで、文緒はここにやつて來た。

小高い場所にある竹林からは、屋敷を見下ろすことができた。母屋の甍が満月に照られ、鈍く光つてゐる。東西の門近くには今夜も篝火が焚かれ、夜通しの番をする侍たちの影が動いているのが見えた。

明るい火の傍にいる侍からは、こちらの竹林は暗闇に沈んでよく見えないはずだ。それでも文緒は用心して、竹の影に隠れるように身を寄せて、屋敷を見下ろしてゐた。

少し離れた位置からこつして見渡すと、屋敷の佇まいはどこかよそそしく感じられた。これまで長い間、あそこで働いてきたはずなのに、その実感は湧かなかつた。まるで知らない場所のような気さえした。

整つた白砂の庭も、立派な門構えにも、慣れた親しみを感じることはなかつた。何の感慨も湧かないことに、文緒はむしろ戸惑つた。

けれどそれは、文緒の心が既に、ここから離れている証しなのかもしれなかつた。

一晩、文緒は眠らず考えた。悩み惑い、考えに考えて、そして腹を決めた。

昨晩とは違う、不思議と落ち着いた気持ちで、文緒はじつと待つていた。

……待ち人は、本当に来るだろうか。それは賭けでもあった。

「文緒――！」

落ち葉を踏む軽い足音と共に、息をのむような声がした。文緒はゆっくりと、声のした方を振り返った。

おぼつかなげな足取りで、細い道を上つてくる人影があった。じざつぱりとした簡素な小袖に湯巻をつけ、まとめ髪を布でくるんだその人は、一見すると風呂焚きの下女のように見えた。

けれど近づけば、見紛いようもなかつた。

身に纏うものが変わつても、彼女の美しさは変わらない。自ずから光り輝くような、その麗しさ。確かに、「雲居の方」だ。

水をたたえ潤んだ瞳さえ見て取れる、その近さに文緒は息をのんだ。吸い寄せられるように見つめてしまふのを、止められなかつた。夢なのかもしれない、彼女が目の前にいることをまだ信じられなかつた。

「文緒、本当に、来てくれたのね」

息を弾ませ、姫は感極まつたように口元を押された。文緒も同じ思いだつた。

本当に、彼女は来たのだ。

それだけでもう、すべてがいいと思えた。文緒の中で、最後の心が定まつた。

万感の思いを込めて、深々と頭を下げる。

「……お久しう「う」ざいます」

そのまま、顔を上げることができなかつた。交わしたいと思つて
いた言葉はどうしてかかき消えて、頭の中には何も残らなかつた。
再び会う時を、あれほど思い描いていたのに。

姫は躊躇いがちに問いかけた。

「鞭打たれて、寝込んでいたと聞いたけれど……」

文緒は静かに頭を上げ、頷いた。

「もう平氣です。……私のことを、お聞き及びだつたのですね」「ええ。あなたの話はいつも、へづてに聞いていたの」

姫はふと寂しげに微笑んだ。

「会えないのなら、せめて様子を聞きたいと……。あの屋敷の中に
も、私のために動いてくれる者がいるから」

これも、と姫は麻の袖を撫でた。

「着物を用意して、密かに門を抜ける手助けをしてくれて……。こ
の十年をかけて、私には支えてくれる人ができたわ」
だから今までやつてこれたのだと、姫は言った。

しばし、二人の間にぽつんと沈黙が落ちた。

互いに、この屋敷で過ごした日々を思つた。幼子が大人になるほ
どの長い、しかし刹那に過ぎたような年月を。

一人を取り巻く全てが変わり、道は分かれ、遠く隔てられた。も
う会うことはないと諦めていた。けれどこの夜に、顔を見て、触れ
あうことのできる距離にいる、その不思議を思つた。

今まで、姫がどう生きてきたのかを、文緒は曖昧に想像するこ
としかできない。どんな道を歩んで、この人になつたのだろう。文
緒はその年月の欠片が見えないかと、じつと姫の顔を見つめた。

「私も、貴女のことば、できる限り聞き集めておりました」文緒は少し躊躇つたが、続けた。

「……大臣様や中納言様との、『婚儀のお噂なども』

姫はさつと顔を曇らせた。

「……なんてひどい女だと、思つたでしょ」うつむいて、姫は胸元できゅっと手を握りしめた。「難題を押し付けて、尊い身分の方々を惑わせて。でも、誰のものにもなりたくないかった。今まで、流されるように身を任せて生きてきたけれど、それだけはどうしても嫌だったの」あなたには聞かれたくない話だつたけれど、と姫は力なく微笑んだ。

「私の望みはただ一つ。いつかまた、あなたに会つことだつた

文緒、と名を呼んで、姫はそつと手を伸ばした。桜色の小貝のような爪のついた、その細い指先を、文緒はただ見つめた。望めば簡単に、その手に触れることができるので。今、それほど近くにいる。

びくりと指が動いたが、結局文緒は手を伸ばすことはなく、また頭を垂れた。

手を取つてしまつたら、別れを告げるのを躊躇つてしまつ。

「私も、姫様にお目にかかるてよかつた。最後に」

迷いが生まれるより先に、文緒はきつぱりと告げた。

「私は今日より、この屋敷を去ります」

姫が驚きに息をのんだ気配がした。文緒は目を閉じ、じつと返さ

れる言葉を待つた。

約束したこと、なじられるだろうか。けれど、もう決めたこと
だった。

姫に一皿お食こして、そして去る。つと。

すつ、と氣を落ぢ着かせるように深く息をついてから、姫は静か
に聞いかけた。

「……どうしてか、聞いても良い?」

文緒はゆつくりと顔を上げた。けれど目は伏せたまま、答える。

「それが、お館様との誓約なのです」

十年前の夜、月の光を浴びて輝く彼女を見ていたのは、文緒だけではなかつた。

あの夜、文緒が知つたばかりの名を口にするより前に、二人の背後でがさりと足音がした。

二人ははつと弾かれたように振り返つた。疲弊し擦り切れた警戒心が、ぴりりとまた頭をもたげる。文緒はかばうように彼女を自分の方へ引き寄せ、目を眇めてじつと暗闇を透かし見ようとした。山の獣だろうか。それとも。文緒は、彼女を抱く手にぐつと力をこめた。

この子を、最期まで、守るのだ。

暗がりからよろよろと出てきたのは　白い髪を生やした初老の男だつた。

予想もしない闖入者に、文緒はぽかんと口を開けた。驚きのあまり力が抜け、ふらりと眩暈がした。

こんな山の中に、人がいるなどとは思つていなかつた。その男は、久しぶりに見る「大人」だつた。それどころか、久しぶりに見る彼女以外の「人」だつた。

一瞬文緒は、幻だろうかと疑つた。それほどに信じられなかつた。

だが、男は幻ではなかつた。

籠を背負い、鎌を手にした男は、ぽかんと口を開いて立ち竦んでいた。驚きに見開かれた目は、彼女一人にひたりと定まつてゐる。傍らの文緒になど、気づいてもいなかつた。

「何と、美しい」

男は陶然と呟いた。

この人も、あの瞬間を見たのだ。文緒はすぐにわかつた。この子が月の下で、生まれ変わったように輝く美しさを得た瞬間を。

男はぐくりと唾を飲み込んだ。

「……竹の中に、天女がいらっしゃるとは」

そして魅入られたのだ、この子に。

天女を歸したくないと、羽衣を奪つたお伽噲の男のように。

驚きと感嘆に満ちた男の目が、異様な熱を帯びるのはすぐだつた。

私の家に来ないかと、男は言った。
家に来て、養女にならないか。突然の申し出に彼女は戸惑い、
怖がつて文緒の腕にすがりついた。

「あの人、なんだか怖いよ。文緒、逃げよう」

けれど文緒は、彼女を抱きしめ返すことも忘れ、呆然と男を見上げていた。

衝撃だつたのだ。男がこの時に、ここに来たことが。

月の使者だ、と思つた。

月の使者が、彼女を迎えて来たのだ。

奇跡だつた。死ぬべき定めから彼女を救うため、月がこの男を遣わしたのだ。文緒は強くそう思つた。

何も見えない暗闇に一条の光がさし、道が示された。文緒はそれをはつきりと見た。

彼女は、月の宮に招かれたのだ。

「 あの人々の家に、行かなきや 」

文緒は、袖をひっぱる彼女の手を、そつと外した。そして正面に向き合つた。

手を離され、逃げようといつて言葉を柔らかに拒まれた彼女は、衝撃を受けたように瞳を揺らがせた。不安げに眉を寄せる彼女に、文緒は安心させるように微笑んだ。

「 もう、暗い山道を歩かなくてもよくなるよ。……それに、あの人々が君のお父さんになつてくれるんだって 」

「 そんなの 」

彼女は勢い込んで息を吸い、唇を震わせ言葉を詰まらせた。

胸に溜めこまれていた思いがあふれ、狭い喉につかえているのが見えるかのようだつた。泣きだしそうな顔で、彼女は言つた。

「 私にはお父さんもお母さんもいるよ。……でも、私はいらない子になつたんだ 」

彼女は強くかぶりを振つた。

「 もういいの。いらない子だから、お父さんもお母さんも、いなくていい 」

「 ……どうして? 」

今まで共に歩んできた文緒には、その言葉は真とは思えなかつた。この子は、泣いていたはずだ。父と母を呼んで、必死に、助けを求めていたはずだ。

けれど彼女は、むずかるよつと首を振り続けた。

「 だつて私が子どもじゃない方が、お父さんとお母さんにとって嬉しいことなんだ。だから私、だれの子どもにもならない 」

「 ぱりぱりと玉のような涙を落して、それに、と彼女は言つた。

「 ……私も、だれからも『 いらない 』と言われないなら、その方が

「いい

悲鳴のような訴えだった。

親に捨てられたことは、彼女の心を打ちのめし、深く抉ったのだ。
その悲しみが、怒りが、文緒には痛いほどわかつた。

その痛みは、文緒にある。深く突き刺さった悲しみで、絶えず
血を流し続いている傷が、文緒にある。

だからこそ、彼女の不安を取り除くために笑つてみせた。
「大丈夫だよ。……今度は、望まれて迎えられるんだから」

彼女は祝福と共に迎え入れられるのだ。月の使者に見出されたの
だから。

もう一度と暗い山に捨てられる事はない。悲しい思いをするこ
とはない。そのはずだと、文緒は思った。

彼女は顔を覆い、すすり泣き始めた。文緒は彼女の顔を下から覗
きこんだ。

跪いて、その手を取る。

どうか泣きやんでもほしかつた。今からする約束を、どうか信じて
ほしかつた。

望まれたのは、彼女一人だ。文緒こそが「いらない子」なのだ。
それはよくわかつていた。

けれどこの子が不安だと言うのなら、力になりたいと思つた。

「もし怖いなら、一緒にいるから。ずっと、見ていてあげる。
一人じゃないよ。」

鼻をすすり、彼女は濡れた目を乱暴に拭つた。

こんなにかわいいのに、つい先程まで天女のような美しさでいたのに、やつぱりべそをかいた弟の仕草そつくりだった。文緒は思わず、喉の奥で笑った。

なんて懐かしく、愛おしいのだね。

「……文緒は、一緒にいてくれるの？」

「うん」

「本当に？」

目元を赤く染めて、彼女は疑わしそうに聞いた。

文緒はもう一度、心をこめてうんと頷いた。

「約束しただろ。月の宮に、一緒に行くつて。だから、そうするよ

「わかった」

彼女はこくりと頷いて、やっと花のよつた笑顔を見せた。

「約束だよ」

そうして、彼女は「竹姫」になつた。

そして文緒は男に願い出て、その家の下人になつた。

望まれたのでない文緒が男の家に行くためには、それしかなかつた。少しでも彼女の近くにいたかつた。一緒にいると、約束したのだ。孤独に怯える子どものために、何としてもその約束を守りたかつた。

けれど男は　家の主人は、最初から文緒を疎んじた。

主は竹姫を実の子であるとして、過ぎるほどかしづき愛情を傾けた。そしてその美しさを誇り、広く世間に喧伝した。だから、竹姫が実の子ではないと知る文緒が目障りだつたのだ。

文緒は輝く無欠の宝玉についた、たつた一つの小さな疵だつた。美しく咲き誇る花にぶらさがる、疎ましい小さな虫だつた。主は文緒をそのように見なし、忌み嫌つた。

主は文緒を家に置くことを渋つていた。文緒が下人として働くのを許す代わりに、主は条件をついた。

竹姫の知己であると言つてはならない。

そして、一度と竹姫に近づいてはならない。

会つことも、言葉を交わすことも許さない。もし破れば、屋敷から叩き出す。主人はそう言い放つた。

文緒はそれを了承した。どう思われようと、近くにいることができれば良かつたのだ。

だから主には、置いてくれてありがとうございますと、頭を下げた。そうやって平伏し、顔色を隠すことを覚えた。文緒の下仕えは、そこから始つた。

姫への思いは胸の底へしまいこみ、誰からも見えないようにした。

この誓約を、姫は知らない。

「……貴女にお会いしないことが、私がここにいるための条件でした」

文緒は全てを淡々と語った。

今宵、誓約は破られた。文緒は屋敷を出て行こうと決めたのだ。何より優先し、十年守り続けたものを反故にしたというのに、不思議と穏やかな気持ちだった。

もう、姫に文緒は必要ないだろう。

文緒はこの屋敷で、何の絆も得ることができなかつた。けれど彼女は違う。生まれもつた美しさは磨かれ、香も衣も、身を飾るに相応しいものを手に入れた。皆の称賛を集め、彼女の前に身を投げ出して愛を乞う男たちを数多得た。助力してくれる側仕えもいる。

やはり彼女はすごいと、心から文緒は思つた。

自分には何もできなかつた。ただ同じ屋敷にいるというだけで、彼女のためになどと思つていたことが恥ずかしい。古く幼い約束に、執着してすがつていたのは文緒の方だ。文緒の心には、彼女しかいなかつた。

そうして無為に足踏みをしている間に、彼女はどれだけのものを得たのだろう。身分以上に、どれだけの距離が隔たつたのだろう。

だから、姫に一目会つて屋敷を去ろうと決めた。全て諦めたふりをしてこの屋敷にしがみついているよりも、もう一度でいいから彼女に会いたかつた。今までの感謝と、いつまでも幸せを祈つてることを伝えたかつた。

「今宵お目にかかれたことが、無上の喜びです」

それがかなえば、もう心残りはない。

けれど、姫は涙を流した。

頬にこぼれた大粒の雫に、文緒はぎょっとした。姫は放心したかのように、ぽろぽろと伝つ涙を拭いもしない。見ているだけで、こちらの心が痛むような様だった。

文緒は思わず手を伸ばしかけ、そのままおろおろと指先を彷徨わせた。彼女の泣き顔は、どうしても駄目だ。胸が騒ぎ、どうしていいのかわからなくなる。なぐさめて、その涙を止めてやりたいけれど、その方法もわからなかつた。

姫は袖で目元をそつと押さえた。

「……あなたも、そうだったのね」

え、と文緒は虚をつかれて手を止めた。姫は力なくうつむいて言った。

「誓いで縛りつけられていたのは、私だけではなかつたのね」

「……私も、お父様　　あの人から、文緒に会つてはならないと言っていたわ。……文緒は人質だと、あの人は言つていた」

静かな告白に、文緒は目を見開いた。

何を、言つているのだろう。頭が真っ白になつた。

「この屋敷に来てしばらく、私は誰の言つことも聞かずに、癪癪ばかり起こしていたわ。どうして文緒と引き離されてしまったのか、わからなかつた。私を蔑むように見下ろす周りの大人が、とても怖かった」

それは初めて耳にする、姫のこれまでの様子だった。

「そして誰より、熱に浮かされたようなお父様の目が一番、恐ろしかった」

姫は目を伏せ、ぽつぽつと言葉を落とした。表情のない淡々とした語りだった。過ぎ去った日々を、感情を分けて、ただの記憶として思い起こしている。そんな様子だった。

「家の奥に閉じ込められて、始終見張られているのも嫌だった。悲しくて寂しくて、月を見ては毎晩べそべそ泣いていたの。 そうしたらあの人人が、怒つて」

鬼のような形相だったと、彼女は言った。

「私が言つことを聞かないなら、あの小僧を追いだすぞ、と。 あれを路頭に迷わせたくないのなら、娘として黙つて従え。…… そう言つたわ」

そして、一度と文緒に会つてはならない。言葉を交わしてはならない。 破れば、必ず文緒を追いだす、と。

「それを守りさえすれば、人質の身は保障する。追い出すことはせず、屋敷に置いて使ってやる。…… そう言われて、私は従つた。それしかないのだと、思った」

衝撃に眩暈さえした。足元が崩れ落ちていくような感覚だった。

「そんな

文緒は額を押された。

縛られているのはわが身だけではなかつた。 文緒こそが、姫をこの屋敷に縛り付けていたのだ。信じていたものが全て覆るようで、文緒は愕然とした。

文緒の知らないところで、姫もまた主と誓いを結んでいたのだ。

文緒の身を守るために。

文緒が屋敷にいられたのは、自分が望んでいたからではなかつた。姫に対する人質として、ただ飼われていたのだ。疎まれながらも、決して追い出されなかつたのは、姫と主人の契約のためだつたのだ。膝から力が抜けて、文緒はよろめいた。

「今まで、何のために」

文緒は呻くように呟いて、言葉を失つた。

今までの日々は何だつたのだろう。急に全てがわからなくなつた。あれほど必死に、何にしがみついていたというのだろう。文緒は当事者ですらなかつたのだ。すべては、姫と主の契約で定まつていたのだ。……文緒がこの屋敷にいることさえ。

姫は寂しげに笑う。

「……不思議ね。私たち、ずっと離れていたのに、同じことを考えていたんだわ」

お互いを守りたいと思つていて。お互いのために、この屋敷にいよつとしたのだ。

それは同じだけ、独りよがりなことだつたかもしれないけれど。

文緒はしばらく、顔を覆つたまま動けなかつた。

姫に対する申し訳なさでいっぱいだつた。己を責める声が、頭に響く。

ただ守られていた己が腹立たしかつた。自分のことなど、いつそ捨て置いてくれてよかつたのだ。知らぬ間に、意に沿わぬことを姫に強いていたのだと思うと、のうのうとしていた己が我慢ならなか

つた。

何が、姫の力になりたい、だ。何一つできなかつた、ただここに在ることしかできなかつた身のくせに。

涼やかに竹の葉を鳴らし、風が吹きわたる。顔を上げられない文緒に、姫は何も言わなかつた。優しい沈黙が、文緒には有り難かつた。

けれどやがて独り言のよう、「姫はぼつりと言つた。

「……月に行きたいと、思つていただれど」

文緒はのろのろと頬を拭い、姫を見た。目が赤いと気づかれてなくなかつたが、幸い姫はこちらを向いてはいなかつた。傍らの竹に手を置いて、眼下の屋敷を見下ろしていた。

姫の視線の先、庭の小さな池には、まどかの月が静かに浮かんでいる。

「どうしてか、幼い頃の方が月に近かつた気がする。……文緒が、月の露を飲ませてくれたあの時が、きっと一番月の宮に近かつたのね」

今では、と姫はうつむいた。

「黄金の宮は、もう遙か遠い。ここはまるで、罪人を繋ぐ牢のよつ」

罪人の牢、という言葉の重さに、文緒は胸を突かれた。

この十年は、姫にとつて幸せなものだうといこんでいた。これは月の宮だから、苦しみも悲しみもないのだと。孤独な日々の中で、それだけを心の拠り所にしていたのに。

けれど姫にとつて、ここは牢だつたのだろうか。虜囚のよつ、牢に閉じ込められ捕らわれて、苦しんでいたのだろうか。

姫はゆっくりと振り返った。静かに仄いだその瞳を、文緒はじつと覗きこんだ。

一人は言葉もなく見つめ合った。互いの瞳の奥に隠れた、折り重なった苦しみに触れたいと思った。その傷は分かち合えるものだろうかと、もつと奥く知りたかった。

文緒は崩れるように跪いた。あの夜のよつこ。

「

懺悔も感謝も、どれほど言葉を頑張っても足りないだろう。伝えたいことはあまりに多く、言い表す術を探すことさえできない。そう思つて、文緒は黙つたままでいた。

じつと、ただ姫を仰ぎ見る。口の重い口が恨めしい。

けれど千の言葉より眼差しが、どれほどじの思いを伝えることだろう。胸にぽつりとともつた灯火のよくなこの思いが、伝わればいいと文緒は思つた。

誰よりも大切なだと。

姫は柔らかに微笑んだ。

「文緒、私も連れて行つて」

静かな、けれどきつぱりした声だった。

「あなたが出て行くといつなら、私も行くわ。ここにいる理由は、もうなくなるもの」

文緒はぽかんとして、姫を見つめた。

迷いのない姫の様子に、むしろ戸惑つてしまつ。何を言つているのかわかっているのだろうかと、文緒は疑つた。

「……私には何もありません」

ゆつくりと首を振つて、文緒は言つた。

「私と共に来れば、姫様は『姫様』ではなくなつてしまします。」

「私は『火鼠の皮衣』も『燕の子安良』も、持たないのですから」

姫に捧げる宝物など、文緒はもたない。ひぞつて宝を探し、それを差し出した貴人たちとは違う。これから生きていくには、全て一からやらなければならなかつた。再び暗い道を、手探りで進む暮らしだ。

そんなものに、姫を連れて行つてはいけないと思った。

ここは罪人の牢かもしれないが、それでも飢えることはないのだ。細い綱を渡るような暮らしは、姫君には酷だろつ。

だが、姫はくすくすとおかしそうに笑つた。

「私、『火鼠の皮衣』も『燕の子安良』もいらないわ。そんなもの、ないつて知つているの」

大臣様と中納言様は『存知なかつたようだけ』。そう言つて、姫は悪戯つぽく笑つた。

その表情に、幼い頃の無邪気な面影が重なつて、文緒は息をのんだ。

「世にも珍しい宝物なんて、いらない。私には、お伽噺で十分よ」

姫は両の手で包むように、文緒の手をそつと握つた。

触れあつた手から、温かな光が流れ込んでくるかのようだつた。それだけで、文緒の胸には喜びが湧き上がつた。さつと雲が晴れ、周囲が明るくなつたと思つほどだつた。

竹林に落ちる月の光が、姫を優しく照らしている。淡く光を放つてゐるようなその姿に、文緒は目を奪われた。

衣を取り戻した天女のように堂々と、彼女は言つた。

「それに私は、『竹姫』でも『雲居の方』でもない。ただの貧しい

みなじいだもの。

文緒は、本当の名を知っているでしょ？

文緒はぽかんと彼女を見上げ、笑い出してしまった。

彼女の素直さも率直さも、相変わらずだった。姫ではないと、軽々と言つてしまえる奔放さに戸惑いも感じるが、そのことが懐かしく、やはり小気味良かつた。

「竹姫」でも「雲居の方」でもない、彼女だと思った。珍しい宝より、姫君としての暮らしより、文緒を選ぶと。そう言ってくれているのだ。

「 今の私は、文鷹と名乗っています」

返事の変わりに文緒はそう言つて、一度深く頭を垂れた。彼女はきょとんとした顔で、首を傾けた。

「名を変えたの？」

「ええ。しばらく前、願い出て門を守る侍になります時に。今は屋敷の皆には、そう呼ばれております」

「それはいいわ」

姫はにっこり笑つた。

「文緒が『文緒』だと知っているのは、私一人なのね。

私たち

の本当の名は、お互いしか知らないんだわ」

そういうえばそうだと、文緒も気づいた。

文緒の名を知るのは彼女一人。そして、彼女の名を知るのも、もはやこの世で文緒しかいないのだ。

それはとても、胸をくすぐられることだった。

文緒は微笑み返し、立ち上がった。

そしてそつと、懐かしい彼女の名を呼んだ。

「雲居の方」が満月の夜、忽然と姿を消したことは、瞬く間に國中の人々の噂の的となつた。

急な病でお隠れになつたのか、それとも不埒な賊に盗み出されてしまつたのか。人々は姫の行方を口ぐちに噂しあつた。けれど眞実はようとして知れず、しばらくは、姫に心奪われていた男たちの嘆きのため息が、絶えることはなかつた。

だが、姫と共に姿を消した一人の男がいたことを、知る者はいない。

しばらく後、ある噂が静かに世間に広まつていつた。

それはお伽噺のような信じがたい話だつたが、どうしてか最も眞実味があつた。人々はそれを聞き、遠い月を見上げて美しい姫君に思いをはせた。

それは語りつがれ、やがて真となつた。

「雲居の方」は、月の姫。使いにいざなわれ、月へ帰つたのだと。

十（後書き）

お読みください、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3874s/>

かぐや

2011年5月1日15時12分発行